

(様式 3)

公益社団法人日本心理学会研究集会等助成金 成果報告書

代表者氏名	根ヶ山 光一	所属	早稲田大学 人間科学学術院
研究会等名称	からだと発達研究会		
成果概要	<p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 4 名 (うち認定心理士 0名) 非会員 8 名 (うち認定心理士 0名)</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 (実施内容・成果・将来計画等を用紙範囲内に記載してください)</p> <p>本研究会では、子どもの「からだ」の問題に様々な視点から焦点を当て、検討することを目的としている。子どものからだは、彼らの動物性をたたえた場として本質的に能動的なものである。そのような子どものからだがこころや行動の発達とどう関わるのか、大人が構築した環境がそれとどう整合するのか、もしくは不協和を生んでいるのか。引き続き今年度も、それらを視野に入れ、発達をクロスモーダルに議論していく予定である。「食」「タッチ」「アフォーダンス」「事故」「ボディ・イメージ」などといったテーマを視野に入れ、心理学や医学・工学などといった様々な分野からの視線を重ね合わせて検討することを目的としている。</p> <p>今回は、下記の日時、テーマ及び講師で開催した。</p> <p>日時：2017年3月5日(日曜) 14時～17時 場所：早稲田大学人間総合研究センター分室(高田牧舎2F) タイトル：環境の中での他者の身体動作に現れた志向の観察者にとっての利用可能性 講師：高梨克也先生(京都大学大学院情報学研究科・研究員)</p> <p>発表概要： 共在環境において、各行為主体は他者の身体動作や環境との関わり方を観察することを通じて、自身にとって有用な環境情報を取得したり、当該他者とのインタラクションを開始したりしている。こうした現象は日常的には極めてありふれたものだが、他者の身体動作の観察は当該の被観察主体の側の伝達意図に基づくものでは必ずしもないという意味では狭義のコミュニケーションに含めることが難しく、逆に、環境と関わる身体自体でなく、これを観察する主体の認知と行動については生態心理学的にも扱いが難しいため、従来はこうした現象が体系的に研究対象となることは案外少なかった。そこで、本発表では、こうした現象の例として、ワークスペース内での援助行動や家庭における養育者から乳幼児への注意などを取り上げ、具体例に即しつつも理論的に検討が加えられた。</p> <p>この発表を受けて、参加者から活発な質疑・討論がなされ、相互の研究をより活性化させる会となった。</p>		

研究集会参加者リスト

〈研究会名〉				
からだと発達研究会				
研究集会開催日： 2017年3月5日(日)				
	氏名	所属	会員	認定 心理士
1	根ヶ山光一	早稲田大学人間科学学術院	○	
2	外山紀子	早稲田大学人間科学学術院	○	
3	古山宣洋	早稲田大学人間科学学術院	○	
4	石島このみ	早稲田大学人間科学学術院		
5	山本尚樹	立教大学		
6	阿部廣二	早稲田大学人間科学研究科大学院生		
7	牧野遼作	国立情報学研究所		
8	門田圭祐	早稲田大学人間科学研究科大学院生		
9	高梨克也	京都大学情報学学研究所		
10	長谷川智子	大正大学人間学部	○	
11		立教大学学生 (2名)		
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				
24				
25				

(様式5)

2017年 3月29 日

日本心理学会研究会 2016 年度会計報告書

研究会名称 からだと発達研究会

研究会番号 16020

助成金額 ¥30,000

年 月 日	項 目	金 額
2017年3月5日	講師謝礼および交通費	¥30,000

支出合計 ¥30,000